

&lt;報告&gt;

# 基礎ゼミ2020

## 「音楽と動き」

### Music and Movement

井上 恵理  
INOUE Eri

本稿は2020年9月4日に新入生と3年生を対象に行われた「基礎ゼミ2020お話②音楽と動き」の報告である。筋肉運動感覚と聴覚を関連付けた音楽教育である「ダルクローズ音楽教育・リトミック」を実践している筆者の話と、音楽と動きの関連を伝えるために発表した学生と本学教員によるパフォーマンスをまとめた。

キーワード：ダルクローズ音楽教育、リトミック、ソルフェージュ、即興、ジュネーヴ高等音楽院

## 1. はじめに

「季節が移りかわり、今、ここでみなさんと会えることができました。この半年、世の中には、様々な変化がありました。変化するということは動いているということです。生きているということです。生きている私たちの心や身体は、常に変化し、動いています。音楽も同じです。鳴り響いている音の連なりは生きています。動いています。今日は『音楽は動いている』ということ、共に感じる時間になりたいと思っています。身体の動きと音楽を結びつけた音楽教育の一つに『リトミック』があります。本学ではリトミック教育が実践されています。音楽と動きの結びつきについてお話したいと思います。」(基礎ゼミ2020お話②プログラムより)。

基礎ゼミ2020は、例年通り4月に行われる予定であったが、新型コロナウイルスにより世の中が大きく変わった。入学式もないままオンライン授業がスタートした。夏休みに入り、9月になってやっと、1年生が講堂の大ホールに集まることになった。基礎ゼミの初日に武田学長から1年生へ向けての挨拶があり、室内楽の演奏が行われた。それは久しぶりに大ホールで聴く生の音であり、大きな講堂の空間に響き、身体に共鳴する音楽であった。その感動と感覚を自分自身の心身にたゆませながら、9月4日に大ホールのステージから1年生に向けて「自分が大切にしていること、大切にしている音楽」を伝えることにした。

## 2. 概要

日時：2020年9月4日 13:00～14:00

場所：国立音楽大学講堂大ホール

対象：国立音楽大学1年生（3年生は後日動画配信で視聴）

題目：「音楽と動き」

プログラム：

第1部 話と映像

リトミックの教育的側面と芸術的側面について

ダルクローズ音楽教育の実践（ジュネーヴ高等音楽院の映像）

第2部 パフォーマンス

1. 「リズムアンサンブル」

創作・演奏：くにおんストーン部（音楽教育専修4年生有志）

新井 春斗 青木 雪菜 大塚 舞菜 久保島 里紗 久保田 絵那  
桑野 杏子 内藤 璃々 芳賀 有里菜 藤井 美すず 松下 翠里  
若林 琉生

2. 「日本の音と動き 即興と伝統曲：越天楽」

箏築演奏：中村 仁美先生（本学講師）

動き：齋藤 真唯（アドヴァンストコース）

3. 「西洋の音楽作品と動き モーツァルト作曲・ピアノソナタ K331第3楽章（トルコ行進曲）」

ピアノ演奏：久元 祐子先生（本学教授）

動き：ダルクローズ・リトミック専門コース3年生 4年生

上田 麟太郎 赤石 咲希 小林 みのり 谷口 実沙紀 長場 祐音  
箕輪 紗弥可 藤江 美羽 矢萩 愛良 宮崎 智美

### 3. 実際の流れ

実際に筆者が話したこと、ステージで見せた映像や実演の流れにそって補足説明しながら記述する。以下に掲載する写真、図は、基礎ゼミの中で学生たちに見せたものと、実演の写真である。

#### 3-1 問いかけ

「問いかけ」は、筆者が大切にしていることの一つである。自分で考えてみるということが重要だからである。周りを観察すること、自分自身の内面に問いかけること、その過程で気づくこと、発見することが学びである。大学の授業でも私が心がけていることであり、基礎ゼミのスタートもここからはじめた。最初の問いかけは「動かないで音を出すことができますか」であった。この問いかけに対して、会場の反応は「静寂」であった。それは自問している「静寂」でもあったが、動かないことで生まれる「静寂」であった。つまり、動かなければ音は出ないのである。「それでは音を出してください」と伝えた。一瞬の戸惑いのあと、会場から舌を鳴らす音が聞こえる。音の鳴らす方向をみて私は「ありがとう！そこにいたんだね」と答え、舞台下手のスクリーンに「音がする→何かが動いている→音＝存在」の文字を映し出した。どんな小さなささやきでも声帯の筋肉が動いているから音が出る。見ただけでは身体は動いていないように見えても、音がするという事は身体のどこかが動いているのだということに気づいてもらいたかった。次に「声を出さなくて、自分がここにいることを音で誰かに伝えてください」というメッセージをスクリーンに映し出した。会場のいろいろな場所から手を叩く音、足踏みをする音が聞こえた。久しぶりに大ホールに響く生音を身体で感じた瞬間であった。音を出すという人間の最初の行為を再確認したのである。

#### 3-2 拍手はメッセージ

手を叩いて音を出す行為「拍手」について考えてみよう。どんな時に「拍手」は生まれるのだろうか。今までにどのような拍手をしたら。どのような拍手をされたら。心から感激した時の拍手と、そうでない時の拍手は音もリズムも叩き方も違う。拍手はメッセージなのである。音楽家や役者にとって舞台の観客からの拍手は

最高の力になる。コロナ禍の医療現場に携わる人たちに向けて、毎日時間を決めて町の人たちがベランダで拍手をしているというニュースを耳にした。拍手はメッセージであるということの象徴的な話である。

このような話を客席の学生にした後、舞台上手から手を叩きながら一人の学生が登場する。クラップと足踏みだけでリズムを生み出し、客席の学生とリズムで掛け合いをした。

### 3-3 身体は第1番目の楽器

今回の私の基礎ゼミの話の背景の一つに「リトミック」という音楽教育法がある。リトミックは、スイスの作曲家であるエミール・ジャック＝ダルクローズ (Emile Jaques-Dalcroze 1865～1950) が考案した音楽を身体の動きと結びつけて体験しながら学ぶ音楽教育法である。ジュネーヴ音楽院で和声とソルフェージュを教えていたダルクローズは、音楽を聴いている時と表現する時の生徒の身体の動きを観察することで、聴覚と筋肉感覚の繋がりを確信し、この教育法を考案した。音楽は耳で聴くだけでなく、身体全体に共振し鳴り響く。ダルクローズは「音楽的感覚は、からだ全体の筋肉と神経の働きにより高まる」と言った。また、動く身体を媒体に考えると、そこに音楽と時間・空間の関係が見えてくる。それらの概念を以下のような図に表し(図1、図2)、「身体は第1番目の楽器である Corps est un première instrument」というダルクローズの言葉を学生たちに示した。



写真1 基礎ゼミお話 2020年9月4日

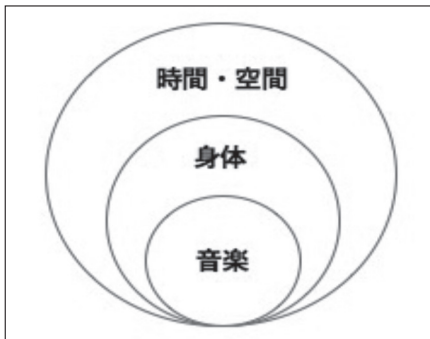


図1 音楽と身体と時間・空間の関係 (井上2019)

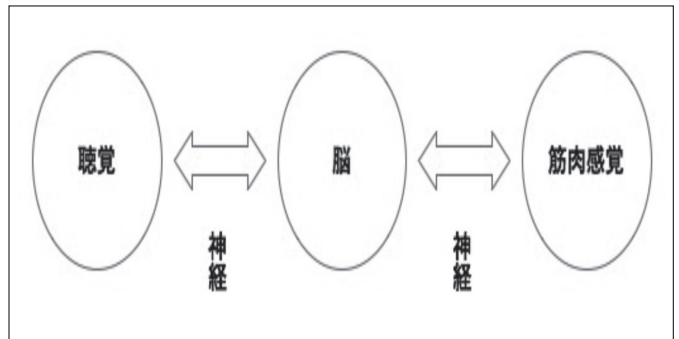


図2 聴覚と筋肉感覚の関係 (井上2019)

### 3-4 ジュネーヴ高等音楽院と国立音楽大学

ダルクローズは1865年にウィーンで生まれ10歳までをウィーンで過ごす。その後ジュネーヴに移り青年期を過ごし、19歳の時に演劇と作曲の勉強をするためにパリに発つ。アルジェリアでオーケストラの第2指揮者として仕事をするが、27歳からジュネーヴ音楽院で和声とソルフェージュを教えるようになる。作曲活動や教育活動をする中で、リトミックという音楽教育法を考案したダルクローズは1911年、46歳の時、彼が理想とする音楽教育・芸術教育を展開するために、ドイツのドレスデン郊外のヘレラウという町に移り住んだ。戦争の影響で1915年にジュネーヴに戻り、そこでジャック＝ダルクローズ音楽院 Institut Jaques-Dalcroze を設立する。(1)

私自身は大学では民族音楽学を専攻し、「音が生まれる場」「音楽と人間」が私のテーマであったが、縁があって1989年から1995年までジュネーヴでダルクローズ音楽教育を学ぶことになった。帰国後、国立音楽大学で指導をすることになったが、私の心の中にはいつもジュネーヴがあった。ジュネーヴで出会った恩師、共に学んだ仲間、ジュネーヴの風景、ジュネーヴで聴いた音楽が私を前に進ませてくれた。帰国後も研究大会や国際大会で

ジュネーヴに赴き、また国立音楽大学の教え子たちもジュネーヴに留学するようになった。2013年10月 国立音楽大学とジュネーヴ高等音楽院 (Haute Ecole de Musique de Geneve) の交流協定が結ばれる。<sup>(2)</sup> 私の夢の一つが実現した。それ以来、隔年でジュネーヴ・リトミック研修を実施し、ジュネーヴからも交換留学生を迎えることができた。<sup>(3)</sup>

2020年3月には第4回目の研修を予定していたが新型コロナウイルスの影響で中止になった。

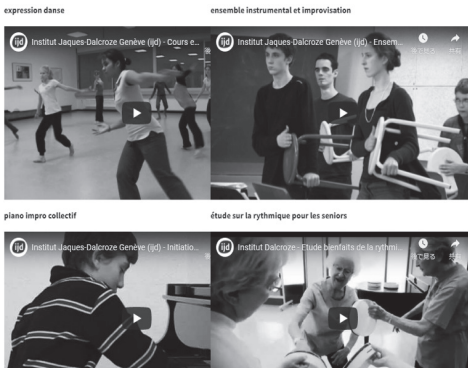


写真2 ジュネーヴ高等音楽院 Web サイトより



写真3 交流協定の提携 2013年10月28日 国立音楽大学



写真4 リトミック研修 2018年 ジュネーヴ高等音楽院



写真5 合同発表会 2018年 ジュネーヴ高等音楽院

### 3-5 実演

今回の基礎ゼミでは3つの実演を取り入れた。以下に紹介する。

#### (1) 「リズムアンサンブル」

まず一つ目は、音楽教育専修4年生の11名の有志によるリズムアンサンブルである。グループ名の「くにおんストップ部」の名前の由来はブロードウェイで活動しているグループ <sup>ストップ</sup> Stomp である。<sup>(4)</sup> Stomp の映像を模倣し、アレンジを加えた3つの作品の発表だった。① Hands&Feets クラップとステップの組み合わせだけで構成されている。リーダーのソロパート、客席との掛け合い (コール&レポンス)、全員でのユニゾンとリズムを重ねたポリリズムを組み合わせて、ステージを動き回りながらリズムを奏でるものだった。② Pedal bin ステージに紙を撒き散らし、それを掃除するという場面設定で始められた。ちりとりで紙を集めるリズム、ゴミ箱に入れる蓋の開け閉めのリズムを楽しませてくれた。③ Brooms 先ほどの紙屑をデッキブラシで片付けるというイントロダクションのあと、デッキブラシを使って8名のパフォーマンスが繰り広げられた。

彼らは授業やサークルの集まりではなく、1年生の時から、音楽教育演奏発表会、芸術祭、MUSIC スペース

といった場でリズムアンサンブルをやりたい学生が集まった有志のグループである。大ホールでのパフォーマンスは反響が大きく、細かいクラップのリズムなど難しかったようだが、チームワークと即興力で生き生きとした舞台空間を創ってくれた。



写真6 Pedal bin



写真7 Hands&amp;Feets

## (2) 「日本の音と動き」

今回の基礎ゼミでは、日本の音、楽器をどうしても紹介しなかった。なぜなら、リトミックはヨーロッパで生まれた音楽教育法であるが、どの文化にも応用できるメソッドであるということ、私自身が日本の音を大切にしているということを伝えたかったからである。選んだ楽器は「箏篳」である。大学時代に2年間学んだ楽器であり、その楽器の奏法の豊かさを知っていたので紹介しなかった。演奏は本学で指導をされている中村仁美先生にお願いした。雅楽の古典曲から現代曲までレパートリーが広く、欧米でも指導や演奏活動をされている素晴らしい奏者である。動き手はダルクローズ・リトミック専門コースで学んだ、声楽専修の卒業生の齋藤さんをお願いした。まず、中村先生から箏篳という楽器のさまざまな奏法の説明があった後、2つの実演をお二人にさせていただいた。

### ① 即興演奏と身体表現

短いフレーズを即興的に演奏してもらい、それを記憶して直後に動く。音の上行、下行、音の長さなどを再現する。ソルフェージュの授業でやっている記憶聴音と同じである。「紙と鉛筆」が「360度の空間と身体」に置き換わっている活動であると学生に伝えた。「身体の動きを見た時に音が聴こえてくるようだった」と感想を後日寄せてくれた学生たちが何名もいた。

### ② 伝統曲「越天楽」の身体表現

越天楽は、箏篳の学習者が最初に学ぶ曲である。日本の伝統音楽、雅楽の知識としても学び、口唱歌も教材にされている。雅楽には左舞、右舞という伝統的な動きもあるが、今回はそれとは離れて、動き手の感性で身体表現をしてもらった。中村先生には最初に口唱歌で伝えてもらい、その後箏篳で演奏してもらった。齋藤さんには同時に動いてもらった。千年前の古の音楽が、演奏と動きによって生き返った気がした。中村先生の箏篳の音もさながら、言葉と声の力に感動した。



写真8 箏篳の音と動き 越天楽

### (3) 「西洋の音楽作品と動き」

私自身が幼少期から慣れ親しんできた楽器はピアノである。今回の基礎ゼミの実演にはやはり、ピアノの音も私には大切であった。作品はモーツァルト作曲ピアノソナタ K331第3楽章（トルコ行進曲）を選曲した。約3分半のこの曲は音楽の様々な要素を含んでおり、多くの人が耳にしているものであり、授業の教材にもよく使っている。演奏は久元祐子先生にお願いをした。久元先生の生演奏を初めて聴いたのは基礎ゼミであった。同じチームになり、講義室のピアノでモーツァルトのピアノ小品を弾いてくださったのだ。モーツァルトがこの曲を生み出した瞬間の空気を肌で感じさせるようだった、あの演奏が忘れられず、今回をお願いをした。以下、お話と実演について記述する。

#### ① 楽曲の生まれた背景と当時のピアノについて（久元先生からのお話）

18世紀後半のウィーンではオスマントルコ帝国の勢力が強くなり、トルコブームが起こった。モーツァルトもトルコのハレム（後宮）を舞台にしたオペラ「後宮からの逃走」を作曲した。このオペラの一部をピアノ曲にしたのがトルコ行進曲である。その時代のピアノは5オクターブの鍵盤のピアノであったが、ペダルが5本もあるようなピアノもあった。シャンツというピアノはペダルを踏むと太鼓の音が出るようになっていて、音色を楽しみながら演奏をしたことがわかる。トルコ行進曲を当時のピアノで演奏した映像が、本学の楽器資料館にあるので見て聴いてほしい。



写真9 久元先生へのインタビュー

#### ② ピアノ演奏 —音楽の聴き方—

演奏を聴いてもらい、音楽の「何」を聴き取ったかを問いかけた。例えば、人と初めて会った時に受けるその人の印象というものがある。その印象、特徴というものは「何」に起因しているのか。音楽の聴き方も同じではないだろうか。この曲の印象は？特徴は？音楽を形づくっている要素を取り出してみよう。テンポは？拍子は？リズムは？調性は？形式は？ etc.

音楽の要素を身体の動きと関連づけて捉えることが、ダルクローズ音楽教育の根幹である。トルコ行進曲にも様々なアプローチがあるが、今回の実演では「調性」に焦点を当てたワークの完成版を発表した。

#### ③ ピアノ演奏と動き

トルコ行進曲にあらわれる6つの調性を、色と関連づけて空間設定をしたのが図3である。私は転調は誰かの家に遊びに行くようなものと例えることがある。その家が近くにあるのか、遠いのか、どんな道筋があるのか考えてみて、実際に場所を設定して動くワークをする。音楽を聴きながら、図3の指先で紙面上をたどる。教室を6つの空間に設定して、全身で動き、移動する。個人ワークをした後、グループで調性を分担して動いた。それが基礎ゼミでの発表である。色分けは学生たちと話し合っただけで決めた。舞台上でもはっきりわかるように、カラーボックス、カラーTシャツ、そしてカラーマスクも活用した。（今回、学生が決めた色は、amoll-青、Adur-橙、Cdur-黄、cismoll-紫、emoll-緑、fismoll-桃であった。）自分の調性が聞こえたら、その曲想に合わせて身体の動きや顔の表情で音楽を表現するワークを発表した。

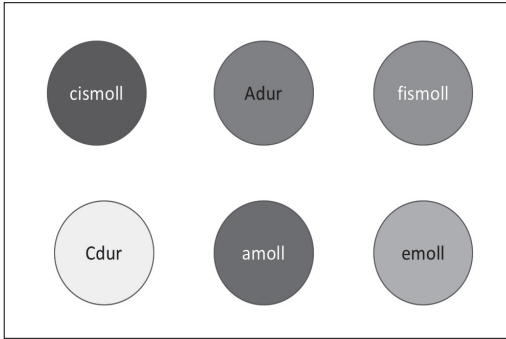


図3 トルコ行進曲にあらわれる6つの調性

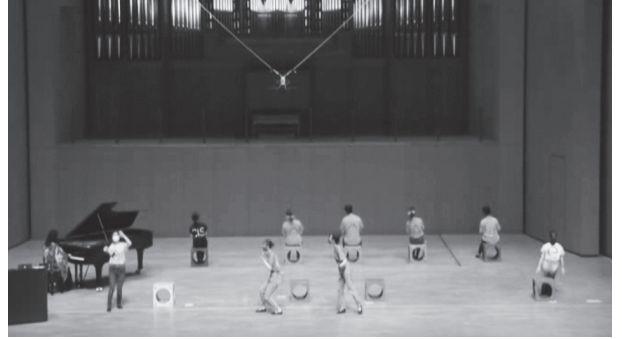


写真10 トルコ行進曲を動く

#### 4. 「音楽と動き」を通して私が伝えなかったこと

私は「音が生まれる瞬間」に興味がある。人はなぜ歌い始めたのか、子どもの発達においても、文化においても、音楽の始まりについて想像するのが好きである。この音楽はどうしてこんなリズムでこんなメロディなんだろうと考えるのが面白い。音が発せられる時の心や身体、感情や身振りというものに興味がある。「音楽は人間の生きている証」だと思っているからだ。動くから音がする。音があるところには動きがある。音楽は、生きている私たちの身体と感情から生まれた。ゆえに音楽を理解するには、身体と感情の感覚を呼び覚まし、身体を動かすことが大切だ。「音楽は生きている」ことを実感するのは、生の演奏に触れた時である。即興演奏はその頂点にある。今回の実演の中で、筆筆と動きの即興演奏には一期一会の輝きがあった。

「演奏」とは音楽を生き返らせることである。「楽譜」はいわば音楽が冷凍保存されたもの、乾燥保存されたものである。作曲家が、未来という時間に残すため、あるいはどこか遠くの場所に伝えるために、鳴り響き生きて動いている音の連なりを固め、保存したものと考えるとどうだろう。熱を加え、水を加えることによって、冷凍されたものや乾燥されたものが元に戻るように、楽譜を読み解き、演奏することによって音楽は生きかえるのである。

「音楽は生きています！忘れないでください！」最後にこの言葉を発して踊りながら退場した。サンバのリズムを奏でながら、出演者一同退場した。久元裕子先生も、中村仁美先生も軽やかなサンバステップで舞台を一巡して下さり退場した。客席の手拍子が拍手に変わり、舞台に司会進行の吉成先生が再登場されこのように話されている声が聞こえた。

「・・・ということで、音楽は生きています。何だか嵐のように過ぎ去ってしまいました。」

#### 5. おわりに

演奏が終わった後に、心と身体にその余韻が残っていくように、まとめの話をするよりも、音楽と一緒に Fade Out したいと思ったのかもしれない。Fade Out は消えるということではなく、遠くに移動するということだと思う。それは、空間における移動かもしれないし、時間における移動かもしれない。西洋の音楽が日本に伝えられたこともそうであるし、古来の音楽が現代に伝えられていることもそうである。それらは続いているのである。

今回の基礎ゼミで素晴らしい音を奏でてくださった久元裕子先生、中村仁美先生に感謝したい。舞台上で生き生きとしたパフォーマンスをしてくれた学生たちに力をもらった。ありがとう。そして、客席の皆さんと、共にリズムクラップをし、同じ響きを共有できたことも幸せに思っている。



写真11 基礎ゼミ出演者全員と武田学長と吉成副学長 「音楽は生きている！」

## 註

- (1) ジャック＝ダルクローズ音楽院 Institut Jaques-Dalcroze は現在、ジュネーヴ高等音楽院 Haute Ecole de Musique de Geneve の Musique et Mouvement 学科として学士課程と修士課程を持つ。
- (2) ジュネーヴ高等音楽院と国立音楽大学の交流協定は2013年10月28日、庄野進学長（当時）と Philippe Dinkel 音楽院院長によって締結された。2014年の第1回リトミック研修については以下に報告されている。井上恵理・神原雅之 「ジュネーヴ・リトミック研修の成果と課題」『国立音楽大学研究紀要』 第49集、2015年 pp213-220
- (3) 写真4にダルクローズの曾孫にあたる Eric Jaques-Dalcroze 氏、筆者の留学時代の恩師 Marie-Louise Hatt-Arnold 先生の姿がある。彼女は国立音楽大学創立70周年の時に、2週間にわたって、大学、附属小学校、中学校、高校でリトミックの授業をしてもらった。中館栄子・井上恵理・馬淵明彦 「Marie-Louise Hatt-Arnold 教授来日の意義をさぐるーリトミック指導の実際を通してー」『国立音楽大学研究紀要』 第31集、1997年 pp115-129
- (4) Stomp は1994年イギリスで生まれたパーカッショングループで、身体や日常用品を使ってリズムを奏でる。ブロードウェイのオフプログラムで現在も活動している。

## 参考文献

- ・井上恵理 (2019) 「リトミック (ダルクローズ・メソッド)」 斎藤忠彦・菅裕編著『中学校・高等学校教育養成課程 音楽科教育法』 教育芸術社
- ・ジャック＝ダルクローズ、エミール (2009) 『リズムと音楽と教育』 山本昌男訳 全音楽譜出版社
- ・ジャック＝ダルクローズ、エミール (2011) 『音楽と人間』 河口道朗訳 開成出版